基調講演

地球家族時代の到来

韓国統一思想研究院院長
李 相 軒

この基調講演は去る六月二十四日、神奈川県にて開催された第八回「国際統一思想シンポジウム」で、李相軒先生が語られたものです。（文責・編集部）

序

共産主義体制が崩壊してから、人間は今や、戦争の脅威から解放され得るという希望を持つようになった。そればかりでなく、目前に近づいた二十一世紀に向けて、闘争と戦争によって綴られてきた人類歴史の流れが、新しい転換時代に向かっているという希望を持つようになった。

今まで人類を苦しめた国家利己主義的な覇権主義が消えさって、国境と人類の壁を超えて、地球家族時代の到来という新しい環境を迎えるようになった。これは闘争歴史の帰趨から見ても、摂理史の流れから見ても、当然な現象である。

1. 共産主義の崩壊と資本主義の限界

マルクスが約束した共産主義の理想社会は「富のあふれる社会」、「真の自由の国」、「労働が喜びになる社会」、「必

要に応じて分配される社会」、「階級のない社会」、「道徳的な不正のない社会」であった。マルクスは、その理想を「事物は闘争によって発展する」という唯物弁証法に従い、暴力的な革命によって実現しようとした。

ところが、実際に現れた共産主義社会は、ことごとくその反対のものとなった。それは、暴力によって苛酷に人民を支配する独裁社会であり、経済的には完全に停滞し、破綻した社会であった。

マルクスの共産主義の試みは、完全なる失敗であった。しかし、これはマルクス主義理論が間違っていたということであって、共産主義の理想そのものが間違っていたわけではない。公平、正義、自由の理想は、やはり実現されなくてはならない人類の理想なのである。その実現は、マルクス主義ではない、新しい理念によらなくてはならないのである。

一方、利己心を中心とした自由競争を基調とする、アダム・スミスの経済学に基づいて成立した資本主義社会において、貧富の差と労働者の疎外という問題が生じた。企業は資本家の私有下におかれ、労働者は企業経営のメンバーとは見なされなかった。労働者は、単に契約によって会社に雇われただけの被雇用者であり、労働者に支払う賃金は単に生産費の一部と見なされたのである。したがって、不況の時には不必要な施設を減らすように、労働者は簡単に解雇されたり、レイオフ（一時帰休）された。

そのような資本主義において、当然ながら労働者は疎外され、経営者に対する反感、企業の業績に対する無関心が生じ、ストライキ等が頻繁に起きるようになったのである。

また今日、資本主義社会において、空洞化した人間頭脳をうめる行きすぎた個人主義・利己主義と、そこからもたらされた家庭の崩壊、麻薬やエイズの蔓延、不倫や犯罪の増大などが深刻な問題となっている。結局、資本主義においても、人間の疎外の問題は解決されなかった。

共産主義は崩壊し、資本主義も限界にきている今日、人類は共産主義と資本主義を超えた、新しい第三の道を求めている。共産主義も資本主義も西洋のキリスト教文明から生まれたものである。したがって、第三の道は従来の西洋文明の限界を超えた新しい文明、新しい主義でなくてはならない。

2. 科学文明による自然破壊

西洋文明の限界を示すもう一つの現象が、科学の発達に

よる自然破壊である。今日、地球上の生物の活動を支えている生態系が、人間の無節制な活動によって危機にさらされている。炭酸ガスの増加による地球の温暖化、フロンガスによる大気中のオゾン層の破壊、森林破壊、酸性雨による被害などの環境破壊がそれである。工業社会において、増大する「ゴミの洪水」をどう処理するかという問題も深刻である。特に、有害廃棄物の処理が大きな課題となっている。放牧や薪の採取などによって、土地が砂漠化していくことも深刻な問題である。

近代自然科学の確立の道を開いたのが、フランシス・ベーコンであった。その後、今日まで約四百年にわたって、科学万能の時代を迎えることになった。「われわれは先入的な偏見を捨て去ってから、客観的に自然を観察して、正しい認識を得なくてはならない」と、ベーコンは主張した。ところがベーコンの自然に対する態度は、自然を人間の力で暴力的に支配するというものであった。そして、ベーコン以来、科学は主として「自然を支配する」ことを目指すようになったのである。

今、地球は「宇宙船地球号」とか、「ガイア」（Gaia，ひとつの生命体としての地球）とか、「かけがえのない地球」と呼ばれるようになった。そして地球の生態学的なバランスを守り、「地球を救おう」という環境保護運動またはエコロジー（ecology）運動が、世界的に高まりを見せている。ここにおいてもやはり、従来の西洋文明の限界を超えた新しい哲学に基づいて、科学の在り方が探求されなくてはならないのである。

3．地球家族時代の実現

東アジアを中心として築かれる新しい文明は、東アジアにとどまらず、地球全体の文明へと拡大するようになる。新しい文明社会は共生主義、共栄主義、共義主義の社会、すなわち共生共栄共義主義社会である。それこそ、共産主義、資本主義の問題点を克服した、真の理想社会であり、全人類が一家族となる地球家族主義の社会である。

共生主義とは、神の真なる愛に基づいた共同所有を内容とする主義をいう。しかし、その共同所有制度は、同時に個人所有も認める制度である。共生主義社会の基本は家庭である。家庭においてすべての財産は、たとえ法的には父母の名義になっていても、実質上、父母と子女の共同の所有になっている。それと同時に、家族の一人ひとりは、それぞれの部屋とか、衣服を持ち、小遣いも持つようになる

第８回「国際統一思想シンポジウム」で講演する李相軒先生

のである。そのように家庭においては、愛を基盤として全体目的と個体目的の調和のもとに、共同所有を基盤としながら、個人的所有も認められるのである。

家庭におけるこのような所有形態が、社会、国家、世界へと拡大したのが理想世界の所有形態であって、それが正に共生主義の社会なのである。この社会は、社会所有を内容とする社会主義（共産主義）の要素と、私的所有を基盤とする資本主義の要素が調和した社会なのである。

共栄主義とは、民主主義の理想である自由、平等、博愛の理想を、神の真の愛を中心として実現する共同参加の政治であり、立法、司法、行政が相互間に円満な授受作用をなす政治である。

そして共義主義とは、全人類が共通に、普遍的な倫理・道徳を守る社会を実現する主義である。

共生共栄共義主義社会を実現するためには、全世界が等しく繁栄しなくてはならない。そのためには、技術を持つ国と技術を持たない国の格差がなくならなくてはならない。

そこで、文鮮明先生は早くから「技術の平準化」を説かれた。一九八九年十月、ソウルにある新羅ホテルで開かれた「中国パンダ工業都市建設説明会」において、文先生は、「技術は、その恵沢が人類全体に行き渡るようにするため

の神の祝福である。先進国が技術力を独占して、それを手段として、低開発国家に不利益を与えることは、また一つの搾取であり、罪悪である」と語られた。技術の独占は、結局、分裂と不和の火種となり、世界平和を威嚇することになるのである。

世界経済の平準化をなし、人類一家族の理想を実現するために、一九八一年、ソウルで開かれた「第十回科学の統一に関する国際会議」において、文先生は国際ハイウェイ建設を提唱された。これは、海底トンネルによって日本列島と韓半島を連結し、韓半島から中国を通るアジアハイウェイ、さらには中東、ヨーロッパを通過してロンドンにまで至る国際ハイウェイを建設するという構想であった。

ところで、ハイウェイの道の両側、少なくとも一キロの地帯は、国境を超越した中立の緩衝地帯にするという。このハイウェイにより、国境を超えた経済や文化の交流が頻繁になり、技術の平準化が促進され、地球一家族世界の実現へ向けて、大きく前進することができるのである。

今、アフリカでは約二千万人が飢えに直面していると報じられている。文先生は、多くの人々が餓死の危機に瀕しているという事実を深刻に受けとめられた。そして、人類の食糧問題を解決するためには、水産業を世界的に発展させるしかないと考えて、一九七四年以来、アメリカにおいてそのための準備を継続してこられた。産業活動において、陸地の大きさには限界があり、資源にも限りがある。また、緑の革命によって食糧を増産することはできるとしても、それも限界に達する。そこで、大きな可能性を持っている広大な海に未来を託すほかないのである。

歴史家アーノルド・トインビーは、「たとえ私たちの子孫が今の十倍になるとしても……海は人類の冒険心を受け入れる広大な領域であり、その生存を確かに保障する」と述べた。今は正に、トインビーの予言の確実な実現が期待される時である。

人類が互いに争い奪い合うことをやめ、海の資源を大切に守りながら漁業を発展させる時、その予言は必ず成就するようになるのである。統一運動はその成就をめざして、アメリカにおける最後のフロンティアに挑戦しているのである。

一九九五年四月、文先生は南米ブラジルにおいて、「新しい希望農場宣言」を発表された。これは、南米に一つのモデルとして理想社会、理想国家を建設しようとする計画である。南米が選ばれたのは、そこには広大な未開の地があり、現代の堕落した文明の垢(あか)があまりついていない地であって、新しい文明を築くのに適しているからである。そこに先進国の技術と資本を投入し、技術の平準化を実践しようとするのである。そして自然と万物を愛し、保護しながら、創造性を発揮していくのである。そこでは、あらゆる民族と人種が真の父母のもとで兄弟姉妹となり、人類一家族社会をつくるのである。

技術の平準化を進めて、全世界が豊かで平等な社会を実現するためには、民族を超え、国家を超えて、全人類を等しく愛する思想がなくてはならない。そのような思想とは、共産主義を克服しながらも民主主義の混乱を収拾し得る思想であり、超教派運動による宗教の統一をなし得る思想であり、民族の対立を和解せしめる思想であり、東西文化を統一し得る思想である。

それはまた、自然を愛し、自然を保護しながら、科学を発展せしめる思想である。人間は神から創造性を与えられており、それによって自然万物を治めるようになっている。神の創造性は愛に基づいたものである。したがって人間の創造性も、本来は愛を中心としたものである。

ところが、人間は堕落することによって愛を失い、自己中心的な欲望を中心として創造性を発揮してきた。そのため今日まで、特に科学万能の現代において、人間は環境破壊等に見られるように、自然を暴力的に支配してきたのである。

神の創造された自然において、環境破壊はあり得ない。人間や生物が安全に生きられるように、あらゆる心遣いがなされているのである。人間が、そのような神の心遣いを受けついで愛の創造性を発揮するようになれば、自然破壊の問題は自動的に解決するようになるのである。

以上のような課題を解決し得る内容を持っているのが神主義、頭翼思想、すなわち統一思想である。一九八八年十二月、文先生の指導により、東京で「東アジア統一セミナー」が開かれた。そこには中国の教授四十名と、日本と韓国の教授がそれぞれ二十名参加し、一週間にわたって文先生の唱導されている統一思想を聴講した。摂理的に見れば、その時を契機として東アジアは、統一運動の推進する共生共栄共義主義への道を歩みはじめたのである。

一九九〇年には、ソ連(当時)で「モスクワ大会」が開かれ、文先生はその時、ソ連に対して道徳的・経済的ルネサンスの必要性を訴えられた。その時を契機として、旧ソ連であるロシアの地においても統一思想が受け入れられるようになった。そのようにして世界は今、神主義、頭翼思想による新しいルネサンスを迎えようとしている。明らかに、古い時代が過ぎて新しい時代が近づいているのである。■